

シ リ ヤ へ の 旅

安 芸 皎 一

○

遅くなつては危いといわれ、明るいうちにダマスカスに入らねばと、せきたてられたのではあったが、地図を探すと、準備に追われ、食事に手間どるなどして、ベイルートを発ったのは午後の2時を大分過ぎていた。在ダマスカスの田村公使が丁度その日の午後ベイルートに来られたので、帰りに一緒にゆこうということで、公使の自動車にのせていただいた。私達の自動車は日章旗をなびかせながら、レバノン山脈への登路にかかった。うしろは地中海である。アスファルト舗装の美しい坂路は、オリーブの段々畑の間を登っていった。このあたり一帯は別荘地である。いまは扉をうちつけて空家であるが、夏にでもなれば、ベイルートの町は山に引越すのだということであった。標高1,300mの峠に出ると、一帯は岩と雑草で覆われていた。一時間ほどで峠を越えるとよく耕された平地になる。私達はまもなく、地中海に沿って2列に並ぶ。次の山脈アンティ・レバノンの登りにかかる。レバノンとシリアの国境に出た。レバノン側で出国の手続きをすませて、シリア側に入る。実をいうと私達は都合がわるくて、東京でシリアの入国査証をとることができなかったのであった。ベイルートでも同様で、ここでは夜2時間ほど移民局で、いろいろいや味などいわれてようやく24時間の入国許可をもらったのであったが、ここでは田村公使のお世話でなんのこともなく、手続きをしてもらっている間、所長の部屋でトルコ・スタイルのコーヒーをご馳走になりながら所長と雑談に、しばらくを過ぎたのであった。それでもここを出たときにはもう日は暮れていた。大体このあたりの緯度は東京と同じくらいで4時半ともなれば大分薄暗くなるのであった。アンティ・レバノンを越えて平地に出たところで、私達の自動車は止められた。灯りを消せというのである。幾台かの自動車止められていた。空襲警報が発令されたというのである。明るいうちにとっていたのが、とうとう間に合わず、おそれていた最初の機会にぶつかってしまったのであった。それでも30分ほどで解除となり、6時頃にダマスカスに入り、新オマヤド・ホテルに泊った。町は灯火管制下で薄暗かった。まず食事を急げといわれたのであったが、それでも終りにサイレンが鳴り、間もなく電灯は消されて真暗になってしまった。地下室に待避せよというのである。これも30分余りで解除となり、ようやく部屋に到着することのでき

たのは、東京を出てから5日目の11月2日午後10時一寸前であったのである。

私達が羽田を発ったのは10月29日の午後5時30分であった。いまどきシリアに旅立ったというのは、シリア政府がユーフラテス河域開発計画の調査立案を国際入札にだすということになり、外務省からの申入れで、国際建設技術協会がこれを引受け、その依頼によつたもので、一行は農林省の下川君、建設省の川村君、電力中央研究所の熊川君に、丸紅建設部の広江君との5人であった。飛行機のエンジン事故のためにサイゴンで15時間の滞在を余儀なくされた。たまたま飛行場で久保田豊さんにお目にかかり、日本工営の方にサイゴン郊外を案内していただいた。しかしこのサイゴン滞在がなかったら私達は真直ぐベイルートにはいれたかもしれないと思うのである。私達がカラチに着いたときに、初めてスエズ運河をめぐる紛争が重大化したために、イラク、シリアの上空が飛べなくなったということを知らされた。事情はさっぱり判らない。飛行機はコースをテヘラン、ローマと変えたから、とにかくテヘランまで行けというのである。テヘランに着いたところ中近東航空のローカル線も飛んでいない。次はイスタンブールによるからそこで待てという。イスタンブールに着いたのは31日の午後4時頃であった。29日にイスラエルがエジプトに進駐し、31日から英仏軍がスエズの爆撃を始めたのだという。事変が始まってからまだベイルート行きの飛行機は飛んでこない。しかもいつ飛ぶかは判らないという。しばらくここで待てというのであった。偶然のことから外務省留学生の木浦君と連絡がとれ、ラジオや新聞によるニュースを教えてもらった。翌朝フランス航空の事務所連絡したところ急に今日の午後、レバン航空の臨時機が飛ぶことになったということで、2時頃ホテルを出て飛行場に行ったのであるが、都合で出発が次第に遅れ飛び立ったのは5時一寸過ぎであり、ベイルートに着いたのは8時50分であった。私達は入国査証をもっていなかったで、手続きに手間どり、このために2時間ほど費し、24時間の滞在許可をもらって、ホテルに着いたのはほとんど12時に近かった。レバン航空の世話でようやくホテルに着いたのであった。英、仏、米の諸国ではこのような事態になったので、アラブ諸国での居留民の引揚げを勧告したとのことで、中立のレバノンではホテルはどこも満員、ようやく下町に小さなホテルを

見付けてくれたのであった。翌朝眼覚めて窓をあけると、下は市場で雑踏しており、その先に地中海が静かに横たわっていた。翌朝在レバノンの古内公使を訪ね、事情をおききする。事態はどれもよく判らないというのであって、シリアに行き私達の仕事ができるか、どうか、さえ危ぶまれるのであった。在シリアの田村公使に電話したところ、都合で自分がそちらに行くからということで、こちらでお待ちすることにし、しばらく古内公使からアラブ諸国についての見解などおききしてから町に出て、食事をする。ベイルートの町は平静で、近くで戦争が、など一寸も感ぜられないほどであった。午後公使館で田村公使にお会いした。そしてご一緒することにしたのであった。

○

朝ホテルの窓をあけると、下の通りを小ぎれいな背広を着た子供達が皮カバンを手にさげて声高に話しながら通りすぎていった。後で聞いたら隣りのブロックに中学校があるのだ、という。赤味がかった黄色い石造の家が並んでおり、その奥には同じ色の岩山が聳えていた。空の色が青い。町角に武装した兵隊を見るのではあるが、朝の町は静かであった。この大きなホテルはがら空きで、食堂へ出ても2、3組にすぎない。ベイルートとは違って、こちらは外国人はほとんど引揚げたのだという。

私達は3日間をダマスカスに過した。田村公使に中東事情をいろいろお聞きしたり、公使の紹介で公共事業省のカッツェム・ヤザール次官とか、ガープ開発庁のアブダル・バセッ・カティーブ長官に会って、ユーフラテス河域開発についてのシリア側の意向などを尋ねた。そして大体何を考えているかということを知ることができた。あるいは私達の考え方も伝えて了解を得るのであった。なんでもぎっくばらんに話し合うことのできたのは何よりであった。なんでも今日までの経過は、話すという、非常に好意的に取扱ってくれるのであった。このような事態になったので国内の旅行は容易ではない。私達は参謀本部の次長から旅行証明書をもらい、また内務次官からガソリンの配給許可証をもらわなければならないという始末なのである。田村公使の世話でなんとか手続きをすませることができた。暇をつくって夕方には旧市内を見物する。なんといっても4,000年が同居して



写真-1 ダマスカスのパザール旧市内の商店街

いるような町である。ダマスカスは世界で最も古い町だといっていた。

ユーフラテス河域の開発は、何も今日に始ったものではなく、1931年にはすでにフランスの測量会社が地上測量を行い、全流路延長に亘って五万分の一の図面を作成し、5kmくらい置きに横断測量を行っている。これに続いてイギリスのサー・アレキサンダー・ギブが1947年にはユーセフ・パシヤのダム地点から上流の航空写真測量を行い、ダムの設計から、灌漑計画の主要をすませているのであった。1954年に世界銀行の調査団がきて、「シリア経済の発展」という報告書を作成しており、このなかで、具体的にユーフラテス河域の開発計画を述べている。世界銀行はユーセフ・パシヤのダムとこれにつく灌漑計画については融資を行うという段階まできたのであったが、その契約条項に、融資による機材とか物資の調達先を決めているということなどから、シリア側がこれを不満とし、契約を中止したというような話まであるのであった。これはユーフラテス河沿いの一部ではあるということなのではあるが、イギリスの一会社が航空写真測量を行っており、この程度で中止したという話があった。とにかくこの開発計画はいろいろな経過を持っているのではあるが、ここで新しい立場でシリア側がやってゆきたいというのが、今回の国際入札の起りだということであって、今日までの経過を詳しく私達に話してくれるのであった。

ダマスカスに着いてから4日目の昼過ぎに現地調査に出発した。1行5人の他に公使館から案内としてシャリフ氏を同行させてくれた。そしてこれは2日目からであ

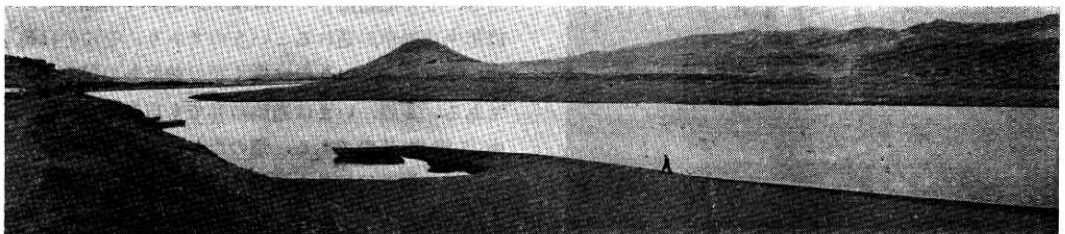
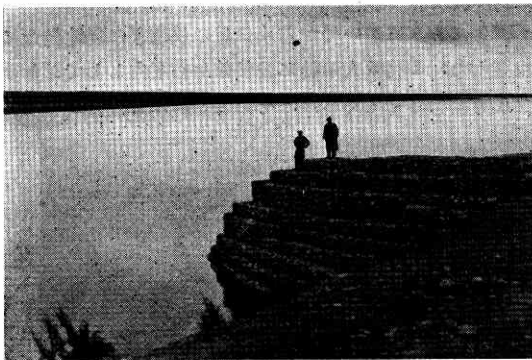


写真-2 ユーセフ・パシヤのダムサイト

ったが、ガーブ開発庁の長官は、私達のために同庁の技師サダウイ氏を一行に参加させてくれた。シリヤはいま戒厳令下にあるので、私達にとってこのような援助は何よりのものであった。その日はおよそ 200km 走ってハマに泊った。夕食後に町に出てみる。町は雑踏していた。シャリフ氏が、気がつかれましたか、女が一人もいないでしょう。この辺りは非常にコンザーバティブなのだというのである。なるほど頭を黒白の布で巻き、厚地のガウンのようなものを羽織ったアラビヤ服の男の人達が特に目立つのであった。

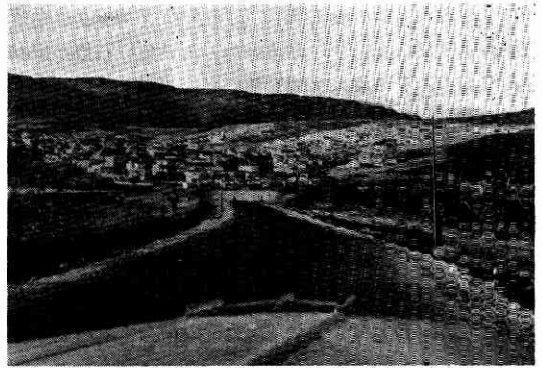
ホテルの前を川が流れており、両岸に向かい合わせで直径 10m ほどの水車が動いていた。川から水を汲み上げているのであって、ギーギーという音に、昨晩は眠れなかったでしょう、と尋ねられたが、私にはそれほどでもなかったのである。が確かに単調な音は遠くまで響いているのであった。実は私達がここで泊ったのは、ガーブ開発庁の長官から、一日都合すればガーブ地域の開発事業がみられるから寄ってゆかないかといわれて、ガーブに近いハマに泊ったのであった。翌朝ホテルにガーブの事業所から若いシリヤ人の技師が迎えにきくれた。

ガーブの開発事業というのは今日シリヤ最大のもので、着手してから3年目だという。地中海に平行して南から北に流れているオロンラス河に沿って南北およそ 30km 余り、東西 10km ほどの湿地がある。これはその湿地の北端で川を横断してバサルトの岩肌が走っているために堰きあげられた形になっているのであって、これを開きまして湿地を干拓しようというのであり、これがおおよそ 3 万町歩、これが出来たらこの前後の水利施設を改善し、上流に 2ヶ所、3 億 5 千万トンの貯水池を設けて、灌水しようというのであって、この前者の事業区域を合わせると全体で、およそ 6 万 5 千町歩の、いわば土地改良事業というのである。この事業の総合調査はオランダの NEDECO が引受けたのだといわれ、狭塞部の開きく工事はユーゴの手ですでに完成していた。いま排水幹線の開きくがドイツとイタリアの建設会社の手で進められていた。まだダムは着工されていない。



写真—3 ユーフラテス河の水制

私達はガーブの事務所で説明をきいてから、ランチで工事中の排水幹線路を見た。それから狭塞部の開きく工事の施工したのを見て、その下流の事務所では昼食のご馳走になったときは午後の 4 時を大分過ぎていた。4 時半ともなるとおおかた暗くなる。時間の上からいって東京と余り変らない。ここからはラタキヤ・アレppo間の舗装道路を走って、午後 7 時 30 分に、アレppoの町についた。ここではスエズ事件の直前にチユニジャ内乱の起きたときに、フランス人経営の高等学校が焼打ちされたというのであるが、私達の今日の印象では至って平穏で、灯火管制もここでは行われていなかった。ダマスオスで土地の人から、どこに行くのかと尋ねられたときに、ユーフラテス河に行くのだといったら、南の方なら危いが、北の方だからそれなら心配することはない。といわれたことを思い出すのであった。今日の行程はおおよそ 250km であった。



写真—4 アレppo～ラタキヤ間の道路

翌日からユーフラテス河の調査にかかる。大体シリヤは地中海に沿って南北に走る地域とトルコ境の東西の山岳地帯は年雨量は 500 耗ないし、600 耗、なかには 1,000 耗というところもあって、森林なども見られるのであるが、東南部は全くの沙漠になっており、雨量は零というのである。私達の歩いたところは大体 200 耗から 300 耗というところであった。雨期は大体 12 月から 3 月までであって、この辺りの畑は丁度棉花の収穫を終えたところであった。今年は少し雨期が早く、棉花をつまみおわらないうちに降ってきたので、どうも工合が悪いといっていた。地図をみると、凡例に、道路は全季節道路、乾季節道路というのとトラックという 3 つに分けてある。全季節道路というのはアスファルト舗装で、これは年中自動車を通れるというのであり、その他は乾季節だけ、トラックというのは漸く車の輪だちの跡のあるだけである。実際、いまは道路の外でも自動車はどこでも自由に走れるのである。畑のなかでも自由というのである。舗装道路は棉花を満載してアレppoに向かうトラックで賑やかであった。これを追い越すために私達の自動車はたびたび一度は速度をおとさなければならぬので

あった。

私達はまず最初の日にトルコ境のジェラブロスに行つて、初めてユーフラテス河を見たのであった。市長に会っているいろいろと事情を聞いた。国境に近く、トルコ領内に鉄道橋が架けられていた。バグダッドに行く鉄道だという。引き返して、しばらくしてから舗装道路と別れ、いわゆるトラックをあちらこちらで道を尋ねながら、再びユーフラテス河に出る。ユーセフ・パシヤのダム地点を見た。そこで日が暮れてしまった。暗くなると、トラックを走るのは容易なことではない。すぐ道が判らなくなつてしまい、さっぱり走れない。アレppoのパロン・ホテルに帰つたのは午後7時40分であった。

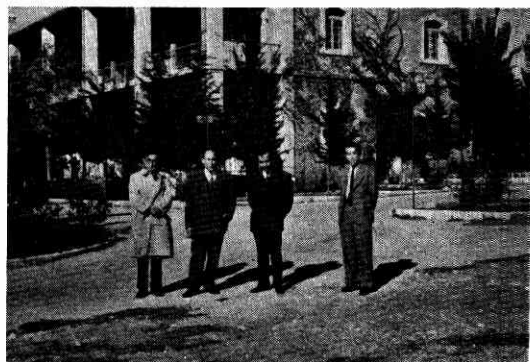
翌日はユーフラテス河に沿って東に走り、デイエルゾールに泊つた。毎朝ガソリンの入取に手間どり、出発はどうしても9時を過ぎてしまうのであった。それで泊りがどうしても遅くならざるを得なかつた。デイエルゾールに着いたのは午後5時40分で、やはり真暗になつてしまつたのであった。

ユーフラテス河のシリア領内の延長はおよそ680kmで、トルコ国境のジェラブロス河床高がおよそ海拔325m、それから下流のイラク境で大体166mというから、平均して河床の勾配は4,300分の1、流量は最も渇水したときで毎秒200立方mで、近年の最も大きな洪水であった1929年の洪水では、トルコ境で最大流量がおよそ毎秒10,000立方m、下流のイラク境で7,000立方m程であった。といわれるから、延長こそ長い、川の形や規模からいふと、日本の河川を見ているような気がするのであった。大体400~500mの幅の常水路で、渇水面から5~6mの高さに平坦地が続いており、これはいわゆる高水敷で、1929年の洪水には冠水したといわれ、ここでは灌木も茂っているし、広く耕されている。この平坦地の上に大体15mから20mの高さに台地が続いており、さらにこの上に10mほどの高さで、また台地が続いているのであった。これらの台地は平坦で、目に入るものは単調な一つの地平線で、赤味をおびた黄一色である。ところどころに部落があるが、同じ色の石か土で造られたもので、蔭でもささない限りは一寸見わけがつかないほどである。あちらこちらに井戸を掘って灌漑している。このようなところで少し奇意に感じたのであるが、溝を掘って水を集め、これをポンプで高いタンクに汲み上げ、これをコンクリートのトレススルで支えた水路で相当遠くまで水を送るような設備を持っているところがあつた。ユーフラテス河からもポンプで20mから25mほど揚水して畑に水を灌いでいる。ポンプは大体ジーゼル発動機で運転している。このような揚水所が5,000ヶ所、ユーフラテス河に沿って1,000ヶ所ほどもあるといひ、ユーフラテス河の洪水で何が問題かと尋ねたときの答は、洪水の後に流路が変り、ポンプ

場を移さなければならぬのが問題なのであつて、何とか流路を固定してもらいたいのだといふのであつた。

聞いていたのではあるが、河畔を去つて意外に思つたことは、この土色の部落に、そのかたわらにはベドウィン族の天幕が張られ、羊の群れがあるかなしかの草を食べながら動いているなかに、大型のトラクターからプラウ、さらにコンバインをしばしば見受けるのであつた。この付近では小麦の耕作は完全に機械化されており、棉花でもボールつみのみか人の手によつてゐるのだといふのであつた。羊の大群が麦畑の刈入れ跡を移動してゐる。

私達はデイエルゾールに2泊して、ハラビヤのダム予定地点とか、今度の灌漑計画地域を視察した。デイエルゾールはイラク国境から200軒ほどのところにあつて、人口10万余りの町である。古い町だといふ。朝ガソリンを受取りにいつている間、町をそここつと歩いた。裏通りに出ると土色に塗りつぶしたような住宅街である。ロバに荷をつんだアラビヤ人が通り、黒一色につつまれた婦人が通りすぎる。ある町角をまわつたところで、声高に話しながら急ぎ足に通る若い婦人達に出合つた。バリットした黒のスーツや、紺や赤のスーツにハイ・ヒールという扮装であり、黒服の人達は薄いヴェールをなびかせている。私はダマスカスの郵便局を思い出した。元気のよい若い女事務員である。後で聞いたのであるが、4ヶ月ほど前から女事務員に代つたのだといふ。川岸には荷を満載した舟がついていた。ユーフラテス河岸の橋のたもとのレストランでお茶にした。サダウイ氏は新しいアラブの話をするのであつた。町の新しい建物といへば大体学校である。そして元気のよい娘さん達はたいい学校の先生だといふのである。私達はラッカの町によつてアレppoに帰つた。私達はそれぞれのところで水利関係の仕事を担当している役所を訪ねて、いろいろと話をきいた。アレppoではシリア大学の工学部を訪ねて、学部長のハッキイ博士と懇談した。4年制度で学生は



写真—5 アレppo大学工学部長ハッキイ博士
(左より2人目)と筆者(左端)

100名、シビル・エンジニアリングの課程だけである。実験室など案内してもらったが機械とか、電気の実験設備がよくととのっており、本当の意味のシビルであり、われわれはシリヤが今日要請している役に立つ技術者をつくるのだといていた。動力や灌漑の教授達をも交えてしばらく話込んだのであった。アレppoではさらにアレppo政庁水利局の灌漑主任技師のカーティス氏から北部シリヤの詳しい水利事情を聞くことができた。

13日の午前には早昼食をすませ、1時一寸過ぎにアレppoを立って帰途についた。アレppo・ハマ間はシリヤでも最も開発されたところといえるであろう。灌漑設備がよくととのっていた。ハマでは、さきに泊ったアビル・フイダ・ホテルで小憩してお茶にした。まもなく暗くなり、ダマスカスのニュー・オマヤド・ホテルについたのは7時50分であった。夕食も終わろうとするところで、空襲警報が鳴り渡り、まもなく電灯は消されてしまった。しばらくすると高射砲が鳴り始め、高射機関銃のガタ、ガタという音が響いてきた。まもなくこれはやんだが、不気味な時間がなお30分ほど続いて、解除のサイレンが鳴り、電灯がついた。コーヒーをすませて、ホテルの前に出てみた。灯火管制はしばらくの間に大分上手になり、町は薄気味悪い暗さであった。ただ隣りの中学校が月明りにきれいであった。武装をした兵隊が通り過ぎていった。

8日間の行程は2,860kmであった。よくも走ったわけである。忙しい旅であった。もう夜は大分寒いのであるが、重油が統制されているといて、暖房はやっていないし、湯も出ないのである。ボーイに毛布を余分に一枚頼む始末であった。

○

シリヤはこの10年に非常に変わったのだという。長いトルコの治下から第一次大戦後にフランスの委任統治領となり、完全に独立して丁度13年だという。第二次大戦に連合国に主として食糧を供給して蓄積した資金を、戦後独立してから、これを農業開発に投資した。私達の見た灌漑設備は大体これによってまかなわれていたのであった。特に棉花に重点をおき、在来棉を米棉に取り換えている。この成績は非常によかった。同時に紡績工場を増していった。さらにビートとか油脂作物をふやし、その精製工場を建てたのであった。朝鮮動乱以後の好景気はその成果を著しく強化していった。もともとシリヤはかつてのシルク・ルートの終点であり、織物と窯業、特にガラスの製作が行われていたので、これらの産業の近代化が進められて、今日では板ガラスの輸出さえ行われ、近代的なセメント工場もつくられている。これらの成果が農業の機械化を促進したのであった。そのうちにイラク石油会社の輸送管が国内を横断するようになり、今日では公共事業の半ばはこれの収入でまかなっ

ているのである。ユーフラテス河の開発も資金があるからやるのだとさえいっようなのであった。1939年にくらべると今日では国家予算は大体3倍強になっているという。1953年の資料では、全輸出の40%は棉花であって麦類が19%、家畜が13%であった。365万の総人口のうちおよそ70%が農業人口であって、総国民所得の50%が農業収入だといわれている。一級農業地といわれるのが大体200万ヘクタールで、この他二級地と考えられるのがなお大体300万ヘクタールにあるといい、これらのおよそ50万ヘクタールが常時灌漑されており、75万ヘクタールが機械化されているのだというのである。人口1人当りの耕地面積からいうと相当開発されているといえるであろう。アラブ諸国のなかでは最も大きな数字を示している。そして今日の人口増加率はおよそ年に2.2%程度で、これは小さい数字ではない。対策として経済の拡大が要求されており、まずシリヤは農業国であるから、この面での拡大安定を図り、これに関連して農産加工工業から、その工業化を進めてゆきたいというのである。今日のシリヤの発電設備は一般供給用として45,000kW、自家設備用は大体20,000kWであって、一般供給は1951年から国営となっており、主として家庭用に送られているのであって、工場は大体自家用設備を持っており、そのおもなものは、ダマスカス、アレppoのセメント工場、それに繊維工業あるいはホムスの精糖工場などである。今日小規模な古い火力発電所が2ヶ所ほどあるが、大部分はジーゼル発電所である。そして揚水ポンプの動力は大体ジーゼルを使っており、その総馬力数はおよそ50万馬力ということであった。

ユーフラテス河のユーセフ・パシヤで、30mほど堰をあげると背水が丁度トルコ境にまでおよぶことになる。これで大体20億トンほどの貯水をするのであつたのである。これで灌漑も行いたいというのである。水の利用具合によるのであるが、大体10万kWはこれで発電することができる。ジーゼル発動機をこの電力で置き換えたい。さらに工業用にも幾らか回すことができるであろう。

下流のハラビヤにダムを造り得られそうな地点がある。ここに低いダムを造ってユーフラテス河の左岸に灌漑したいのである。いずれの場合でもできるだけ水を堰き上げて自然灌漑を行いたい。しかし問題は上流の背水がトルコ領におよんでは困るし、また下流はイラクの沃野であつて、イラク境で灌漑時の流量を今日以下に減らすこともより困難であると考えられていることである。

われわれは土地は十分にある。上流、下流の限られた条件のなかでわれわれはどの程度の水を利用することができるであろうか。限られた水はどのように使うことができるであろうか。土性が大きな要因になるのであるが、この場合どのような作物を、どのように輪作す

ることが、収穫を最大限に上げると共に、地中の消耗を防ぐことになるのであろうか。このように水を使った場合、どのような電力が得られるか。これはまた自然灌漑とポンプ揚水の限界を決めることになる。この場合に残った電力は何に使えるであろうか。ある工業を考えた場合どの程度の補給電力を必要とするであろうか。

今日ユーフラテス河の灌漑地域では大体小麦と棉花の3年輪作を行っており、小麦と棉花を作って一年は休ませることにしている。別に牧草地はもっていない。われわれは15万から20万の遊牧のベドウィン族をもできるだけ定着させたいのだという。このような計画を立てるにはどのような調査をしたらよいか。まだ地図も不足しているところがあるし、もっとユーフラテス河自身の事情も知らなければならぬ。土性も知らなければならぬし、水質についてもそうである。その上に安定した農業経営を営むにはどうしたらよいかという問題がある。これらについての調査を行い、その上で計画を立ててほしい、というのが、今回のシリア政府の要求するところであった。一つの地域開発のモデルである。

シリア政府はこのなかから、資金の都合を見はからって、逐次必要なところから具体化してゆきたい、というのであった。

○

私達は13日の夜ダマスカスに帰ったのであるが、そこで聞いたことは、スエズ事象がおきてから油の事情が窮屈になり、どこの会社も飛行機の本数を減らしており、16日のベイルートからイスタンブールに行くパン・アメリカンの飛行機をにがすと次は日程が決められないので、一応この飛行機の座席を予約しておいたといふことであった。翌日、ベイルートへ確かめてみたのであるが、これととも、イスタンブールで翌日東廻りのパン・アメリカン機に乗れることは乗れるのであるが、バンコ

ックまでしか座席は確保できないというのであるが、これを遅らせば、やはりその先は判らないというので、大体事情は判ったから、ダマスカスの要件は打ち切って15日にベイルートに出ることにした。ダマスカス滞在は1日半しかなくなったので、また仕事は急に忙しくなってしまった。資料の確認やら挨拶回りで忙しい1日半であった。15日には朝8時にガープ開発庁に長官を訪ねて旅行中お世話になったお礼を述べると共にしばらく懇談した。そして正午一寸過ぎにダマスカスを立ち、せっかく来たのだからと途中少し回り道をして、バルベックのローマ時代の古跡を訪ね、7時頃ベイルートのホテル・エクセルシオンに到着した。

いろいろと面倒なこともあったのであるが、田村公使やシリア政府の人達の助力で、大体ここまで来た目的を達することのできたのは何よりのことであった。16日の朝は美しい光が地中海に跳っていた。朝食後にホテルの庭に出て、しばらくヤシの木を通しての地中海を眺めた。静かな朝であった。英字新聞のないシリアでは私達に判るのはラジオの「ブリテンの声」だけで、その他は通訳してもらっただけであった。ミグの戦闘機がどうのこうのと、いろいろうわさを聞いたのではあったが、私達の実感は大體平静ということであった。同じアラブ連盟といっても東の方と西の方では多少事情は異なっているようで、シリアは丁度その中間にあって、スエズ停戦のあととは、特に両陣営からの宣伝の場ともいような感じを多少とも受けるのであった。

私達は16日の午前11時に古内公使に、それから今回行を共にした丸紅の篠田氏と、また大溝氏に送られてベイルートの飛行場を立った。翌一日をイスタンブールの見物に過し、その日の午後11時にまたパン・アメリカン機に乗り、そして19日の夕方羽田飛行場に帰着した。(1953. 1. 16)

正 誤 表 (1月号)

頁	段	行	種 別	正	誤
7	左	1	式(8)	$\frac{q(V+v_1 e^{j\omega t})}{kT}$	$\frac{e^{-q(V+v_1 e^{j\omega t})}}{kT}$
"	右	下15	式(20)	$\frac{C_p - L_p}{C_T - 208_n}$	$\frac{C_p = L_p}{C_T - 208_n}$
8	"	9	本 文	5μA	50μA
10	"	第14図(図中)	(f=47.74kc)	(f=4774 kc)	
11	"	下9	"	減少に	減少は
13	"	12	"	が、まだ検討中	が、とまた検討中
"	"	20	"	合金接合型ダイオード	合金接合性型ダイオード
14	"	第2図(図中)	オムニオメーター	オムエオメータ	
15	左	下18	本 文	γ線束が大き	γ線が大き
18	右	写真-2	第7図(縮尺)	80mesh, 120mesh 60mesh, 100mesh	60mesh, 80mesh 100mesh, 120mesh
19	"	第7図(縮尺)	本文	200m	20cm
20	右	4	訂 綴	訂綴	訂綴
21	左	6	"	平均粒径は	平均粒径に
"	右	5	"	この間波高	この間波高
26	"	第13図(b)	第7図	周期の縦軸に sec が入る	(脱落)
"	"	第7図	"	オリフィス差圧(横軸)	流量計オリフィス

東京大学生産技術研究所報告
第 6 卷 第 4 号 予告

今岡 稔著「α-族元素硼酸塩系の
ガラス化範囲」

生産研究第 8 卷 第 7 号 291~4 掲載「ガラス化の条件について一主として硼酸塩ガラスに関して一」の詳報で、93の硼酸塩 3 成分系のガラス化範囲のデータを掲げ、Zachariasen の法則を基礎として発展させたガラス化条件を、個々の実例について検討し、その面からガラス成分のガラス構造中の役割や配位数について論じたものである。